

昨 56 年に「入学当初から漢字で学習するのがよい」という指導をうけ、これまで二学期から始めていた「漢字貼り」を、今年は四月から行いました。

新一年生の実態を調べてみると、“家庭教育学級”で推進されている親子読書の影響もあってか、ひらがなはほとんど読むことができ、また書くこともできましたが、字形や書き順は自己流なので、このままほっておくと間違っただけで、頭の中で固定されてしまうおそれがあります。また去年は一年生の後半になっても、まだひらがなに抵抗をもつ児童が、少数ですがいたという反省の上に立って、今年のはじめの単元では、とりあえず漢字の数を減らして、ひらがなをしっかりおさえることにしました。

1 漢字への関心

幼稚園ですでに“漢字絵本”に親しんでいる児童たちなので、入学式の当日から漢字で、「出東小学校 一年一組」と板書しても少しの抵抗もなく、またすでに自分の名前を漢字で書ける児童が多数いました。はじめは何と書いてあるか判読できないような字が、一学期をすぎると次第に形が整って、ほとんどの児童が自信をもって漢字で名前を書けるようになりました。

教師が板書するどんな漢字に対しても「わからない」とは言いません。「かなあ」と、まず読んでみる習慣がついていて、他の学校の児童にはみられない漢字に対する関心の強さが出東小の一年生にはうかがえました。

2 漢字貼り

入学当初の国語の内容は、ほとんど絵だけでありますが、そこにも早速漢字を貼っていきました。新一年生ははたしてやってくれるだろうかと不安でした。ハサミが思うように使えず苦労する子どももいましたが、思ったよりスムーズに出来ました。しだいに漢字が増えるにしたがって能力差が出てきて、時には、早い子どもが遅い子どもを手伝ってやることもあり、はじめのうちは手伝ってもらって喜んでいたり子どもも「今度は最後まで自分でするぞ」と意気込んでいました。また、音読も、ひらがなの時のような“拾い読み”がなくなり、読みやすくなったという子どもがほとんどでした。

第一単元では「海」と「雲」の漢字貼りをしました。どちらの漢字も二度ずつ出てくるので、子どもたちは大変よろこびました。第二単元では「熊」「子栗鼠」「仲良く」などの漢字貼りをしました。漢字貼りの原稿は、児童がハサミをまだうまく使えないことを考慮して、単語ではなく言葉のまとまりを一片にして貼らせることにしました。また、まだ数字やひらがなを正式に学習していないので、言葉のまとまりの上に目印になる絵を書き入れ、子どもたちが見つけやすいようにしてやりました。

第五単元の「お月さま」からは、それまでのように言葉のまとまりではなく、単語の紙片を貼らせることにしました。漢字貼り込み用のプリントは、次のようになっています。

このプリントの の中の漢字が、教科書ではかなになっています。

その教科書のかなの上に、プリントから切り抜いた漢字を貼っていくわけです。子どもたちは、の漢字を読んで、教科書の中に該当するその部分に目を走らせます。見つけるとハサミで切り抜き、ノリをつけて、教科書のかなの上に貼ります。

お月さま
 熊さんは、おつかいの帰り道、
 森の中を歩いて いました。
 日は すっかり暮れて、空には
 大きなお月さまが 出 ています。
 「大きな お月さまだ。」
 熊さんは、空を見上げて 言 いました。
 森を ぬけて、丘の上に出ました。
 「あれ、お月さまが……
 熊さんが 歩くと、お月さまも……
 「さっきは森の上 にいたのに、僕が
 丘に出ると丘の上まで ついて きた。」

3 ひらがなの指導

ひらがなは新しい字が出た時点でしっかりおさえ、子どもの間違いを訂正し正しい字が書けるまでノートに練習させました。また、マス目に縦横の中央線を書き入れた五十音の手本を用意して、正しい字形

を書けるように敷き写しもさせながら、第五单元に入るまでには五十音の学習を終えました。

4 お話朝礼

五月からはお話朝礼を始めましたが、はじめのうちはなかなかお話の中へとけこめないようでした。お話の中の言葉から連想したテレビのコマーシャルの話をすることもありましたが、六月頃からは真剣さが出てきて、お話朝礼を楽しみにするようになりました。

お話をしながら内容の一部を漢字で板書していきました。書いた時点では読めない漢字でも、話のあとで読ませるとみんな読んでしまいます。子どもたちの頭はまったく吸取紙のようでした。

〔一学期〕5月18日 「熊の風船屋さん」

< あらすじ > 栗鼠のお母さんと子どもが森を散歩していると、熊の風船屋さんがいろいろな色の風船をいっぱい持ってやってきました。子栗鼠はお母さんにねだります。一つ買ってもらうと、また一つ、また一つ……とたくさん手に持ちました。すると子栗鼠は空へふわふわと浮いて上り始めました。さあ大変、動物たちがやってきて助けようとするのですが、なかなかつかまえることができませんでしたが、やっとのことで、驚が助けてくれました。

< 提出語句 > 熊 風船屋 黄色 緑 赤 青 子栗鼠 栗鼠のお母さん 象 猿 木 麒麟 鷲

<指導メモ> 「熊」「子栗鼠」の二つは、すでに貼り漢字として目に触れているため、すぐに読めました。子どもたちは風船が大好きなようで、熊の風船星さんが持っている風船の色をめぐる活発な反応を示して聞いていました。色に関しては運動会も近いので、四色を出しましたが、子どもの反応によっては白や茶色、その他の色も提出します。

5月25日 「橋の上の狼」

<提出語句> 谷川 一本橋 長い 一人 兎 狼 狐 狸 猿 熊 朝日 夕日

<指導メモ> 動物の漢字は喜んで読みました。「朝日」は一回しか出てこなかったの、後でもう一度読ませた時は読めませんでした。

6月1日 「瓜姫」

<提出語句> 瓜姫 昔々 お爺さん お婆さん 箱 お嫁さん 瓜 赤ちゃん 美しい娘 荷物 爪 手 足 体

<指導メモ> 「お爺さん」「お婆さん」と聞くと「ああ柴刈りだ」という発言がでて、「箱」の漢字に「ももだ」「いや、ちがうみたい」と反応がありました。「はこ」と読んでみせると「そんな話あったかなあ」と不思議そうに聞いていました。「爪」「手」「足」「体」はほとんどの子が読めました。

6月8日 「はなたれ小僧さま」

<提出語句> 昔々 貧乏な男 町 川 龍宮の乙姫 トホウ 花 小僧

<指導メモ> 「はなたれ小僧」と聞いて、子どもたちは自分のことのように感じたらしく、自分の鼻の方へ手をやっていました。「貧乏な男」と聞くと、「石川ごえもんかな、猿飛佐助かな」とつぶやき、「小僧は着物は汚いの？ 貧乏な男の服は？」と質問がありました。また、貧乏な男がはなたれ小僧に「帰る家はないのか」と言って追い出したら、もとの貧乏な家に戻ってしまったと話すと、「あんなこと言うからだ」と話の中に入りこんで来ました。

この頃から話を真剣に問くようになり、お話の後で出てきた漢字を読む時も大きな声で一所懸命に読むようになりました。

6月15日 「松の木の下の老人」

<提出語句> 昔 美しい娘 お坊さん 命 北 高い山三つ 松の木 三本 白髪の老人三人 盃 酒

<指導メモ> このお話はおもしろそうに聞いていました。「昔」「娘」「木」「酒」はすぐにわかりましたが、「お坊さん」を「おじょうさん」と読んでいました。

6月22日 「馬になった男の話」

<提出語句> 昔 三人の男 伊勢神宮 安宿 宿屋の主人 草もち 馬 ばくろう(馬の商人) 石 砂利 沼 人間

<指導メモ> 宿屋の主人にだまされて馬にされ、その敵討ちをするというすこし深刻な話なので真剣に聞いていました。「神宮」を「じんじゃ」と読み、「安」を見て「女がついてる」と言っていました。

6月30日 「うぐいす長者」

<提出語句> 昔々 ある村 貧乏なお百姓さん 親切 娘 部星(一つ目 夏、二つ目 秋、三つ目 冬、四つ目 春) 不思議

<指導メモ> 大金持ちの娘のお婿さんになったお百姓さんが「三つ目まではあけてもいいが、四つ目はあけてはいけませんよ」といわれ部屋の鍵をまかせられた、というお話です。お婿さんが鍵をあけていく情景を話すたびに「おどろきー、わあ」「冬、やあ、へえ」と反応し、あけてはいけない約束の四つ目をあけた時は「あーあ、あけちゃった」と話の中に入りこんでいました。漢字は「親切」が読めませんでした。

7月7日 「猿のおむこさん」

<提出語句> 猿 昔 お百姓さん 草 山 白 藤の花 一ばん目 二ばん目 三ばん目の娘

<指導メモ> 「猿」と書いたらすかさず「あ、動物だ」と声があがったので驚きました。けもの偏に気づいたのでしょう。「象かな、馬かな、猿かな」と勘であてていました。

(二学期)9月21日 「みしのたくかにとをたべた王子さま」

<提出語句> 昔 種 朝顔 西瓜 南瓜 王子さま 馬車 王さま お妃さま 大臣

<指導メモ> 初めてカードを利用しました。同じ漢字が何度も出てくる時、お話の筋に合わせてこのカードを移動させます。「みしのたくかにと」という言葉がおもしろいらしく喜んで聞いていました。「西瓜」と「南瓜」の読みをとりちがえていましたが、「朝顔」は一学期に理科で学習したのですぐ読めました。

9月28日 「大きな蟹」

<提出語句> 隠岐の島 モトヤ村 木こり 斧 ヤスナガ川 奥の山の中 大きな滝 絵のような 美しい姫 神

<指導メモ> 「金の斧」と内容が似ているため、初めは「知ってるよ、知ってる」と得意そうにしていたのですが、滝の中から絵のような美しい姫が出てきたあたりから、どうなるのかなと興味が出てきたようです。知っているような話でも子どもは喜んで聞くようです。

10月12日 「さようのなわ」

<提出語句> 斐川町 昔々 婿さん 挨拶 下男 犬

<指導メモ> 「斐川町」は地元の名であるため、さすがによく読めました。「婿さん」を「あんさん」「おばさん」「おじいさん」「お

ばあさん」といろいろに読むのはいいのですが、おもしろがって適当に当てずっぽうで言っている様子でした。「はい、さようございます」のくり返しに喜んでいましたが、最後に「さようなのわ」が切れたのが、よく理解できないようでした。

10月19日「森の動物たち」

<提出語句> 冬 山の動物たち お母さん 毛糸 兎 赤いセーター 狸 青いチョッキ 能さん 白と黒のズボン 栗鼠 黄色い帽子 豚 緑のスカート 馬 茶色い手袋 狐町の動物園 ナムカンポンコンチキコーン 毛皮屋 女の子

<指導メモ> 動物を意味する漢字はすぐ読めましたが、「毛糸」や「狸」が読めないのは意外でした。おまじないのような言葉が出てくると声を合わせて一緒に言ったり、話のっていたようです。題名は後で皆で考えてつけました。

11月9日「猫の恩返し」

<提出語句> お百姓さん 正直者 働き者 貧乏 お嫁さん ある雨の晩 長者 畑 麦粉 人間

<指導メモ> 「働き者」を「動物のどう」とか「うごき者」とか読んでいました。「長者」と書くと「なが」、「畑」は「火と田があるからひただ」と見たことのない字でも、何とか読んでみよう、

考えてみようとする子どもたちの姿勢が見られるようになりました。

11月16日「としよりの犬の話」

<提出語句> 昔々 犬 皮 山の狼 赤ん坊 森の中 命の恩人 魚 肉 猫 鬼

<指導メモ> こわそうなお話なので子どもたちはじっと聞いていました。「恩人」はちょうど国語で「蟻の恩返し」をやっていたところなので、すぐ読めましたが、「命」は難しかったようです。「肉」がでると「あ、肉まん」と言っていました。

12月7日「お母さんの誕生日」

<提出語句> 太郎君 お母さん 妹 十一月二十六日 家族 お父さん 肩たたき券 手伝い券 がまん券 日曜日

<指導メモ> 「みんな、お母さんの誕生日知ってる？」と聞いたら、半数ほどの児童が手を挙げました。「太郎」の「太」を「いぬ」と読んだり、「うちのおじいさんの字だ」と言う子もいました。また「妹」を「おねえさん」と読んだ子もいました。「家族」は読めません。子どもたちにお話に出てきた三つの券を自分でも作ってごらんとっておきました。

〔三学期〕1月18日「お婆さんに化けた猫」

<提出語句> ある冬 男 峠 木 谷間 猫 侍 刀 剣道の名人 人 食い猫

<指導メモ> 「峠」は読めません。「侍」を「てらかな?」と言ったり、「剣道の名人」を「なんとかみちの人」「名前の人」などいろいろな出ました。

1月25日 「宝船」

<提出語句> 「お母さん、お誕生日に何がほしい」 すてきな夢 宝船 折り紙 お正月 枕の下 初夢 枕カバーの中 お父さん ケーキ お姉さん 花模様のスリッパ 銀色 毎晩

<指導メモ> 身近にありそうな話なので興味を示したようです。「帰ってやってみるわ」と言っていたのですが、実際にもやってみた子がいるようです。このように、お話が子どもの現実の生活の中に広がっていくことは教師にとって嬉しいことです。

2月1日 「ひょうたんぼっくりこ」

<提出語句> 昔々 薬売り 元気な若者 村 橋の上 河童 薬箱 金紙 お礼 大金持

<指導メモ> お話の中に入り込めずに現実的に考える児童がいてムードをこわすことが時々あります。「河童がお腹が痛くて苦しんでいると薬売りが薬をあげました」という箇所、「そんな薬が効くかな、河童に。うそだわ」という発言があって、教室がシーンとなってしまいました。これまで

は漢字を読むのはいつも決まった二、三人でしたが、今回はその数が一気に増え、うれしく思いました。

2月8日 「雪猫」

<提出語句> 寒い冬の日 女の子 窓 白い物 細いしっぽ 三角形の耳 ビー玉のような目 金色 銀色 青 水色 緑 猫

<指導メモ> 「白い物」「細いしっぽ」「三角形の耳」と順々に出すのにつれて「わあ、何だろう」と話に乗ってきましたが、猫とわかると「なーんだ」とつまらなそうな様子。お話が終わって「今日の雪もどこかから雪猫さんが運んできたのかもしれないね」と言うと、「なんでそんなことがあるの」と受け入れません。「金」「銀」はよく出すのですが、まだ取りちがえて読む子が多いようです。

2月22日 「小人につかまった女の子」

<提出語句> ずっと昔 森の中 三人 一番目 二番目 土の中 苺 つみ 蜂蜜 鳥の羽 お嫁さん

<指導メモ> 子どもたちは絵本に出てくるようなほんとに小さい小人を想像しながら聞いているので、小人が女の子を捕える所で、「小人は小さいのに、よく女の子を捕えられるね」と不思議がっていました。「女の子はわざと楽しそう……」の所では、「しらじらしいなあ」という声が出ました。漢字はだいたい読めるようになりましたが、他の児童が読

んでる最中に聞いていない子がまだ多いようです。

一年間をふりかえって

新一年生は皆、漢字に興味をもち、抵抗なく受け入れてくれました。「心のうた」は子どもたちに好評でした。これは、詩の暗誦が強制的でなく、子ども一人一人が自発的に家庭で覚えてきたら、それを教室で聞いてあげるという方法をとっているからだと思われます。毎月取りあげた詩は、朝の会で一緒に唱えるので、むずかしい論語のようなものも、一ヵ月ほどで暗誦できました。

子どもたちが、やがて中学生、高校生となって、何かの折に再び「心のうた」の詩に出会った時、「ああ、こんな意味だったのか」と改めてその詩を理解でき、一層の共感を持つことでしょう。

出東小の子どもたちは一年生の時からたくきんの漢字に触れるため、漢字に興味を抱き、どんな漢字でも、自分の力で読もうとします。したがって、たくさんの漢字が正しく読めるようになり、さらに読書好きとなって、いろいろな知識も身につけてきます。

子どもにとって漢字はむずかしいものと思い込んでいましたが、この一年間、このような子どもたちの反応を目のあたりにして、漢字学習のすばらしさを認識した次第です。今後も一肩努力して、石井式漢字教育の研究をすすめていくつもりです。

(担当 佐藤恵子・内部佐依)